
文具屋さんの看板娘

汐見統子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文具屋さんの看板娘

【Zコード】

Z5434F

【作者名】

汐見統子

【あらすじ】

事務用品をこよなく愛する文具店の店員が織りなす物語。店を訪れる、一癖も二癖もある人々と対等に渡り合える商魂たくましい娘の明日はどうち?

序章（前書き）

学生が文具店に訪れたとき、文具店の店頭から見えるのが
だらう、と考へて書き始めました。

文具屋の店員は客を見ている。足先から頭頂部までを視線が貫く。全身をくまなく見渡せば、客の人となりが分かると豪語するほどに。それは客商売をする者にとって不可欠な技能である。本当に何もかもが分かるのだったら苦労はしないが、客に合わせた品物の選出に一役買う。

客に脇田を向ける店員の胸には、深緑のエプロンがかけられていた。店員の正装、或いは戦闘服。すみぶんぐてん白地で店名が書かれている。

この文具屋は、角文具店といった。

「客が動いた！」

文具屋の商品は考え方で配置されている。学生ならばノートやシャープペンシル、その隣には画材などが、事務員ならば「ペーパー紙やインクがまとめて手に取りやすい。特定の業種にある客ひとりひとりが必要としそうなものは一力所に集められているのだ。日常的に誰もが必要とするものをつなぎにして、店中の商品それぞれが何らかの関連性によつて寄り添つっている。

シャープペンシルを買つつもりで文具屋を訪れたら、いつの間にか可愛らしいデザインのノートを手にとつていた、というのはよくある話である。生活に密接しているものになると同時に、夢もまた取りそろえているのだ。

「しめしめ、あそこには今月発売の新商品があるのよ」

店員である彼女のおすすめは、修正テープと蛍光テープを同時に使用できるものだつた。蛍光ペンや修正液とちがつて消しゴムで取り除けるし、なにより液漏れしない。筆箱に入るサイズではないが、鞄にひとつ放り込んでおけばいい。メーカーから送られてきたテスト品を一ヶ月試したところ、耐久性も悪くなかった。

「よし、手に取ったわね」

学生服を身につけた客は、彼女の一押しを買い物かごに納めて再

び店内を巡回していく。島中と呼ばれる、壁に隣接していない棚を一通り見て、単語帳を手にとった。そうして、彼女のいるカウンターのほうへとやってきた。

「これ、お願ひします

「はい、ありがとうございます」

袋に入れるか、テープを貼るかを尋ねて、彼女は買い物から商品を取り出した。速やかにバーコードを通す。小気味よい電子音が鳴る。キャッシャーに値段が表示された。

「84円、670円、合計で754円になります」

「ちょっと大きいんですけど」

客は財布から取り出した一万円札を申し訳なさそうに差し出した。小物を買うときに小銭を用意していらない客というのは多い。おつりが足りなくならないように常に用意しておくのが店の配慮というものだ。

彼女は笑顔で料金を受け取り、紙幣と多数の貨幣を手渡した。きつと、もらつたばかりの今月のお小遣いね。彼女は思った。

「お買い上げありがとうございます、またお越し下さいね」

慣例、あるいは儀礼の言葉を口にして客を送り出す。

客は少し照れくさそうにして店を後にした。

彼女は小さく、よし、と口にした。

時刻は遅く、そろそろ店じまいである。

今日もよく働いたと思いながら、彼女は商品の並びを直し始めた。

「たたずまいが大事なのよ、たたずまいが」

と独りごちる彼女こそ、商魂たましき角文具店の看板娘、角咲さき樹、その人であった。

序章（後書き）

更新は遅いですが、面白ごと黙つて下さった方々のためにすすめて
いきますので、よろしくお願いします。

1・角文具店にその人あり（前書き）

冬の寒い日に文具店に訪れる客。何者なのか？

1・角文具店にその人あり

防寒具なしには外を歩けないような、大変寒い日のことであった。

「白黒白黒、目が疲れるわ」

入店してくる客のことごとくが白や黒、灰色の外套を身につけていた。肌寒さは彩りを奪つ。店の照明は自然光を意識した蛍光灯であつたから、色彩面での簡素な寒々しさがより強調されていた。

インテリアにも気を遣いたいものだわ、とは咲樹の弁である。

角文具店は一般向けの文具を商うし、マニア垂涎の的もまた取り扱つている。高級家具だけを専門的に売る店があるように、格調高くも小洒落た文具店をやりたいと咲樹は願つているのだが、まだ資金面に余裕がない。問屋との交流も親のパイプであるから、それにかじりついている自身はまだまだ修行中の身であることも知つていた。

「だから一層憧れるんだけど」

漏らして、笑みを浮かべる咲樹。

ありとあらゆる文具に精通する文具屋さんて、憧れよねえ。

咲樹は文具店に生を受けたため、身邊には常に文具があった。しかし店頭に置いてある品々は基本的に薄利多売を目的としたものばかり。これといって珍しいものがあつたわけではない。代わり映えのしないものを店先にいくつも並べている様子にうんざりとしたこともあります。いつそ文具が嫌いだったともいえる。

価値観に転換を起こしたのは、元々大工をしていた祖父にとある道具を見せられてからである。出会ったときの衝撃は今でも忘れることができない。

墨を流し込んで線を引く、墨掛け道具。それは大工が木材の加工のために計測、書き込みを行うためのものである。コンパスや分度器、三角定規の役目をはたすものなどがあるが、少なくとも日常的な筆記に用いるものではない。

学校の教科書に掲載される程度には有名なものであつたし、特に珍しいものではなかつた。一方で文具として分類されるかどうかも怪しい。それでも、咲樹にとつては充分に衝撃的なものだつたのだ。決まりきつた形で売られている文具の、原型といえるものとの出会い。

人に歴史あり、ものに歴史あり。

それからである、咲樹が文具の魅力に目覚めたのは。

以来、文具に対しても弁能な学生として周知されるようになるのに時間はかからなかつた。もともと専門家同様に日常的に文具に接しているのである。人がクレヨンを握るよりも速く鉛筆を握っていた、そんな少女が専門家を名乗るようになるのを誰が妨げようか。

はたして咲樹は角文具屋の看板娘としてその名を商店街にとどろかせることになるのだが、それについてはまたの機会に述べることになるだろう。

金曜日の夕刻、学校から帰つて着替えてから、咲樹はカウンターにつとめていた。

日中は母親と祖母が店先に出ているが、日が暮れ始めてから閉店までは咲樹の業務時間である。一時間あたり900円が支給されるあたり、アルバイトとしての割はいい。家業とはいっても、もらえるものはもらうのが咲樹の方針であつた。

最も、この日は先折り咲樹が愚痴をこぼしたように密層のことごとくが厚着しているような天候であり、曇天と冬の寒さが身に染まる。客が去つてしまつた店内にひとりただずんでいるのはいささか辛い。客がきたら店先に出るという方法では売り上げを下げてしまふし、客とほとんど接することなしに物を売ることが咲樹には失礼に思えてならなかつた。そういう意味合いで、咲樹の母がインターネット上でサイトを立ち上げ、文具の通信販売をしていることも邪道である。

店の奥では、祖母が暑いお茶と羊羹で呑気に舌鼓を打つていた。

「今日はやたらとシャー芯がはけるわね」

翌週から近隣の学校はテスト週間を迎えるためか、多くの学生が訪れてシャープペンシルの芯を購入していった。シャープペンシルの芯といつても種類は様々である。ぺんてる、トンボ、パイロット、三菱などの国内メーカーの製品が売れていく中で、外国メーカーのものを買つていく学生もいた。

入念に試し書きをしてから芯を選んで買つていくような客層は、きっとテストには使わないのだろう、と咲樹は思った。余裕があつてうらやましい。

テスト対策をしなくてはならないのは咲樹も同様である。店先で参考書を開く訳にもいかず、かといって自室に戻つて勉強するとなると商品が買われていく様を見守れないでの寂しい。

折衷案など考えられなかつた。

「これください

「はい、163円になります」

日曜日は勉強するからいいんじゃない?

幸せの至りは文房具が売れることがなく、文具を売ること。そのためにはどんな努力も惜しまない。いつかは個人商店を手にするその日まで、またその先にずっと続けていくために。

自身のレゾン・デートルを確認していたところ、ふいに視界を掠めた人物の影に咲樹は顔をしかめた。

「ちょっと

「あ?」

「店の商品を勝手に持つて行くのはやめてくれないかしら」

咲樹は男の行為を見どがめた。

見れば、茶色に染めた長い髪を持つ男の右手が、消しゴムをポケットに納めようとしていた。慣れた手つきで、ごく自然に。包装をはがされていない新品が姿を消した。

「別にいいじゃないか、減るものでもないし」

「減るわよ、何言つているの」

消しゴムひとつの価値といえど、複数の商品の売り上げ利益と等

価である。万引きを黙認するよりでは店が立ちゆかなくなってしまう。

「経済は交易で成り立つていてる。交易を成り立たせるのは何か知つていてる? 信用よ、し・ん・よ・う! 何もかも真つ向から原則に歯向かつてゐじやない」

男は悪びれず答えた。

「自宅なんだから大目に見ろよ」

「あんた別口でしじょうが……ちゃんと料金払え」

ため息を漏らす咲樹。

もはや常習となつていてるが、これが別の場所で発揮されているとしたら……。咲樹の思惑は別にして、男は撫然とした表情で頬をなでていた。

「食費と光熱費は振り込んでいるが

「店の切り盛りには全く関与していないじやない、兄さん」
融通が利かないな、といつて両手を上に向ける男。名前は角智すみとも。咲樹の兄である。角文具店の家族構成からいち早く抜け出すはずだった長男は、今でも店の一階に住んでいた。

咲樹と、智と、父母と祖母を含めた五名が角家の面々である。咲樹の成長に多大な影響を与えた文具通である祖父は昨年他界していった。

智は大仰な仕草で諸手を天高く振りかざし、咲樹を真つ直ぐ見据えた。

「消しゴム一つにこだわるような小さな人間に育てたつもりはない」「はいはい、仕事が煮詰まつたなら素直に言いなさい」

「客がきたぞ」

「いらっしゃいませ」

自動ドアが開いた。

咲樹はつとめて柔軟な表情で客に応対した。妄言を吐いている兄に付き合っている暇はない。

現れた客は、小綺麗な身なりをしていた。茶褐色のブルゾンを身

につけた美丈夫である。安っぽい紙袋も、いつそ美形が手にすれば古書店からの帰りを演出する小粋な品に変わる。

思わず嘆息しかけた咲樹は、しかし店員としての立場を忘れなかつた。というのも、店に入つてくるなり、その美丈夫は咲樹に声をかけてきたからである。

「ここにメカニカがあるという話を聞いてきたんだが」

美丈夫が口にした単語の意味を咀嚼するのに数瞬。咲樹にはそれがシャープペンシルの銘であることが分かつた。

「……少々お待ち下さい、在庫を確認して参りますので」

咲樹は美丈夫に告げると、彼の手、指先を少しだけちらと見てから店の奥に向かつていつた。その後を追うようにして、智もまた店の奥へ姿を消す。

残された美丈夫は満足そうにティスプレイされている万年筆を眺めて待つことにした。

「咲樹。どうして在庫があるか確認するなんて言つたんだ？」

怪訝そうに智は咲樹に尋ねる。

「お前なら、店に何がどれほどあるかぐらい分かっているだろ？」

咲樹は商品の提供を逡巡している。普段なら迷いなく、欲する人のもとへ文具を届けようとする。それがあるべき商売人の姿であり、また咲樹自身もあるうとするのだが。

「もしかして、メカニカとかいうのが惜しいのか？」

智は呆れた目で咲樹を見る。文具を売ろうとしないならば、咲樹は一介の蒐集家コレクターに過ぎず、そんな人間が自分の店を持つなどと公言するのはいい笑いものだ。

だが、咲樹は真摯な面持ちで逆に智に問うた。

「じゃあ兄さんはあのお客さんに売るべきだと思つ？」

「あるなら売れよ。客を選ぶのは商人じゃない。お前が欲しいって言つならそもそも在庫を確認するなんて言つもんじやない」

「のお客さん、ペンを使つていてる手じやなかつた」

「手? どういふことだ」

「わざわざ製図用の高いものを買つていく必要がないってこと」

「欲しがっているんだから別にいいじゃないか」

「メカニカは現在生産停止なの」

ぺんてるの製図用シャープペンシル、メカニカ。

1968年の発売で、製図用のメカニカルペンとしては同社の最高峰の品質を誇っていたが、現在は廃盤。樹脂製のケースに梱包され、メーカー保証書が同梱するという高級品である。ペン本体は彫りこみがなされており、墨入れされたカバーパイプはシンプルながらも美しい。更に特筆すべき特徴として、グリップをまわすとパイプがスライドしてペン先を保護する機能がついている。

定価は3000円もするが、現在ではオークションなどで更に高い値がつけられている。

「小売店の店頭に残つているものを根こそぎ買い取つて、本当に必要としている人に高値を吹つかけるような心ない人もいるの」

「あの客がそうだ、と？」

「そこまでは分からぬ。本当はすぐここでも渡してあげたいんだけど、どこか引っかかるの」

「誰かにプレゼントするのかもしれないじゃないか」

「そう言われると反論のしようがないけど」

でも、と。

「残念だけど、在庫はなかつた、つて伝えるわ。ツテをたどつていつか入荷するかもしれない、つていえまだ心証は悪くないでしょう？」

智は難しい顔をしていた。

「そんなやり方で、いつまでも商売をやつていられると思うか？」

「本当に手に取るべき人のところに届かないことの方が問題では？物を手にするのって、いつだって特別なことよ。世界中の誰もがやつてているわ。あれにしようか、これにしようかという迷いの末に選択する。私には、この次にやつてくる人の可能性を詰んでしまう権利はないわ」

それに、と咲樹は付け加える。

「あのお客様さんが角文具店に足繁く通つてくれるなら、きっと可能性を手にする『次の人』になつてくれるでしょう?」

迷いを振り切つて、咲樹はエプロンを翻しながら待たせた客のものに向かつた。

「足繁く、ねえ。文具店に通う人種なんてそつそいいない。薄利多売でなんとかやつてきた店が何を選ばせるなんていうんだよ。選ぶなんてのは余裕がある人間にだけ許されている特権だ。弱者には何もない。向こう側に選ぶ権利はあっても、俺たちに選んでいる余裕なんてないだろうに。難しいよ、お前のやり方は」

智は腕を組んで倉庫に立ちつくしていた。

店先では美丈夫である客と咲樹が相対していた。

「0・3ミリがないなら0・5ミリはないのか。ディスプレイ棚に仕舞つたものを忘れていたりしないか」

と食い下がる美丈夫に対し、咲樹が誠意を持つて「次にメカニカルを入れることになつたなら、お客様の為にとつておく」旨を入念に伝えたところ、渋々といった態度ではあつたが再度の来訪を確約した上で去つていった。

思えば素敵な顔立ちをしていただけに、本当に再度の来店を心待ちにしている咲樹であつた。

そうこうして日も暮れて、商店街の店々の灯りが落ち始めた頃、また角文具店もシャッターを下ろす時間になつた。

そこで咲樹が気がついたのは、カウンターの死角に置かれていた、先ほどの美丈夫が手にしていた紙袋である。

「あのお客様さん忘れていたのね」

紙袋の外に書かれているのは、角文具店と同じ通りにある古書店の名前だった。買い物帰りに角文具店に寄つていつたのだろうと咲樹は考えた。

紙袋を手に取る。

「あら、意外に軽いわね」

咲樹の想像に反して、紙袋には重たいものは入っていなかつた。

古書店の紙袋なのだから、本が入つていて当然のものだと考えたのだ。本の代わりに中に入つていたのは、使い込まれた様子のキーボードで、タオルにくるまれていた。一般的な直方体のものではなく、フレームが波形となつていて、キーボードで、咲樹の価値観からすると装飾の一種であると判断されたが、実際には人間工学にもどづいて設計されたものである。

「扱いがいいとは言えないけど。普段から持ち歩いているんでしょうねえ」

筆記用具と同じように、文字を打つために作られた機械。咲樹にとつて親しみが湧く存在であつた。慣れた筆でなくては仕事がはかどらないという人がいるように、同じキーボードを使わなくてはならない人もいる。

コンピュータの普及が、事務作業から紙をなくしていくと言われるようになつて三十年は経過しているが、いまだに紙の需要は減っていない。紙と、それに書き込むことを本分としている文具もまた人々に必要とされ続けている。OA関連全般を商うこととは現在の文具店が生き残るために有効な戦略のひとつであるとされている。

角文具店に陳列された商品の中にも、電子辞書やラミネート装置などがある。ただ、コンピュータそのものに関わる商品については門外漢ということではなくて取り扱わないことになつてている。プリンター用のインクであるとか、専用の普通紙などはあつたが、それも紙という分類に属するから置いているのであり、市場が把握できているとは言い難い。

「餅は餅屋、専門的になれやしない」

キーボードの善し悪しは咲樹には分からなかつたが、キーボードの裏面に名前が書かれたシールを発見した。どうやら美丈夫の名前のようにだが、分かつたところであまり意味はない。

咲樹は後日、美丈夫がキーボードを回収しにやってくるのを待つこととした。今手にしているキーボードのように、一つのものを使

い込む人だつたのならば、メカニカを売るべきだつたかもしけり、
と後悔の念にかられた。
まだまだ修行不足だわ、と。

1・角文具店にその人あり（後書き）

下した判断が必ずしも良いとは限りません。

ちょっととした間違いを繰り返しながら、それでもよりよくしようと
するために頑張るのが人間です。

とこうことで近いうちに続きを出せるようになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5434f/>

文具屋さんの看板娘

2010年10月30日05時07分発行